

目的 宮廷行事の1つとして始まり、江戸時代には宮廷・武家の間で毎年6月16日に行なわれた年中行事「嘉祥」について、江戸時代後期にはどのような形式で行なわれ、どのような人々にまで広まっていたのかを検討した。

資料および方法 京都御所近くで開業している上菓子屋「虎屋」に残る江戸時代の嘉祥関係の文書7種（雑用方買物人数扣帳・御用玉附帳・米銭取集帳・井籠帳・御用下附帳・御用帳・御用仕込帳）のうち、安政4年、万延元年分を資料として、①文書間の関係と構成、②米銭取集帳・井籠帳・御用下附帳・御用帳に記載された人物を、公家・御所・寺院個人名などに分類し、各分類での嘉祥の広まり、③御用帳に示された地区名から、御所周辺の地区分け、④米銭取集帳に記載された米銭の量から、当時の嘉祥の規模、⑤御用下附帳・御用帳・玉附帳に記載された注文品から、嘉祥の内容について検討した。

結果 ①各文書に共通する人物からみて、各文書は現存の他にも複数冊存在していた。②注文者は、公家・御所関係が大半を占め、両年に共通してあらわれる。また、個人名が万延元年に大幅に増加し、庶民への広がりを示している。③御所周辺は、禁中御所を中心として「上・下」「東・西」に地区分けされている。④嘉祥の規模はさまざまであり、代金として支払われた米銭の量の範囲は広いが、米1升6合、銭16文を1単位として、米はその約5倍、銭は約15倍程度の規模が多い。⑤注文品の大半は「蒸菓子」であり、その中には大きさや形に変化をつけたまんじゅうなどが多く用いられている。1軒が注文する種類は1～8種で、特に決まりはない。